

注

- 1) FUNDAÇÃO JAPÃO (1999) *Simpósio Estudos Japoneses no Brasil- Anais*. (シンポジウム ブラジルの日本研究—報告) São Paulo.
- 2) FUNDAÇÃO JAPÃO (1998) *Estudos Japoneses no Brasil Pesquisa 9*. (ブラジルの日本研究—調査9) São Paulo.

台湾における日本語教育の現状

方 美麗

学習動機

今台湾では日本語がブームになっていて、日本語を勉強したい若者がたくさん出てきている。学生に日本語の学習動機について聞いたところで「僕は日本のテレビゲームの説明書がよめるために」とか「私は X japan のヒデが好きだった。彼と文通をしたかったからです」とか「日本の歌が好きだから」などのような理由で日本語を勉強する若者が少なくない。そのほかにも、日本の商社に就職したいとか日本語を知っていれば、将来仕事につきやすいとかという理由である。

十数年前、私が日本に留学した時に比べて、日本語はかなり人気が出てきた。当時、日本語だけではなく、日本留学でさえそれほど流行っていなかった。国内（台湾）の大学での日本語教育機関もわずかの私立大学にしかなかった。ところで、近年日本の電気製品や漫画やドラマや流行雑誌などが台湾に大量に入るようになり、日本製品に書かれた日本語が注目されるようになった。日本人の観光客が多いからであろうか町の看板の文字も日本語で書かれるようになり、日本語の音楽もお祭りみたいに台北の町のあちこちに聞こえてくる位の人気ぶりである。おしまいに日本で潰れたそごうが台北の支店では儲かっていて、それに三越、高島屋などの日本のブランドが台湾で商売繁盛している。その光景は、日本人でも信じられない位のものである。このような状態の中に、つい台湾では「哈日族」（日本の物事の追っかける若者のこと）という現象まで出てきている。

教師不足

日本語に興味を持つ人が急増してきたため、台湾の国立大学の日本語学科もたくさん設けられている。その勢いは、私が勤めていた学校（輔仁大学）だけでも年間140名程の学生を受け入れているほどのものである。しかも定員17名の定員スタッフに対して、たった11人でまかなっている。他の私立大学でも年間クラスオーバーするほどの学生を受け入れている。クラスオーバーの語学教育の結果、学習効果がなかなか上がらないのである。たとえば、私が勤めていた大学では（それ以前にすでにこのような状態だったという）作文クラスでは30人程であるが、それ以外の授業はみな70人位の学生がいた。クラスが大きすぎると学生がまとまらないこともある。興味がないのに仕方がなく出席する学生は私語をして、クラスの邪魔をすることも珍しくはない。必要や興味のないものを押し付けられても学習効果は出てこない。

学生数の急増が教師不足につながるが、これには他にもさまざまな問題がある。十数年前の教育シ

システム（一クラスに20人程の学生の時の）を今（一クラスに70人位の学生）も変えることなく、語学教育を行っていることである。急速に伸びた学習者数に学校の教育システムがとてついてもついていけないのが現状である。しかし、それを改革しようとしても、専門家がないため、どこから、どのようにして変えればいいかが分からない。それには、コースデザインの問題だけでなく、カリキュラムや教授法などの問題も絡んでいる。学習動機に対応するようなコースデザインが課題となる。

教師不足ならしかるべき人数をうめるのは当然なことであるが、台湾では3年前から大学の新人の教師には博士号を要求するようになってきている。だが、日本が博士号を出すようになったのはつい最近のことであって、博士号を持つ人がそれほどいるわけではない。教師がなかなか揃わないため、ほとんどの大学では、教師不足で問題になり、授業だけで忙しくて、どうしても研究にまで手がまわらない状態である。しかし、大学で授業をやるだけでは教師は評価されない。研究業績がない教師にはしかるべき評価はされないものである。結局、本来教師不足の状態に、博士号という条件が求められ、採用がなかなか難しい。

教師の質

ついこの前まで日本で文科系の博士号を取得することが難しかったため、日本に留学した者は、博士号をとらずに修士で帰国したケースが多かった。しかも昔は、日本語や日本文学を専門しても金にはならなかったから、経済学や工学などに関する勉強を選ぶ者が多かった。そのため、台湾では本格的に語学に取り組む専門家や教育の専門家はそれほどいなかったのである。

ちょっと前には、日本留学の修士号をもつだけで、分野に関係なく日本語教師の道に進むことができたが、今では事情が変わり、博士号でないと台湾で大学の専任教師になることができない。

このような変化は、これまでの日本語教師の研究力が問われているからである。同じく外国語教師として日本語教師は英語教師より学位や研究力が劣っているからである。

英語の教師の競争が激しいため、台湾の大学で働く英語の教師は博士号を持つのが基本である。しかも、彼らは英語教育を中学校から受け続けてきている。英語の教師は博士号をもらうまでは推定14、15年の英語教育を受けなければならないのに対し、日本語教師の場合は大学から勉強しはじめ、留学して修士号をとって来ててもわずか7年間位の外国語教育だけである。しかも英語の教師は英語で論文を書くだけでなく、洗練されたしっかりした英語力を身につけている。これに比べ日本語の教師は、論文を発表してもそれが、研究論文までのレベルには至っていない。そればかりでなく、論文を書き慣れてないからであろうか、論文の書き方すら分からない教師も珍しくない。それに、日本語の教師は論文発表や研究会になるとやたらに年功序列を気にする。これでは日本語教師のレベルが低く見られてしまう。しまいには、台湾の教育界では、留日派と留米派とかの対立まで出ているようだ。

英語の教師にそう見られても仕方がないと思う。現に今まで日本留学から帰ってきた日本語教師は、論文の書き方や研究方法だけでなく、語学教育の研究すら分からない者も少なくない。もちろん台湾にも各大学に研究会や機関誌などがあり、それに全国大会は毎年一回開催される「台湾日本語教育学会」と毎月開催される「台湾日本語文学会」の二つの学会がある。だが、そこは英語教師から見られているように論文の内容よりも年功による序列化が行われる場でもある。幸いに最近、国内では「台

湾語学会」ができて、台湾の言語ではあるが、若手の日本語教育の先生も積極的に参加するようになっている。他の言語の積極的な研究ぶりの刺激を受け、日本語教師も少しづつではあるが研究改善の方向に進んでいるようである。

教材の問題

だが、先にも触れたように、実際に台湾における日本語教育現場では、教授法やクラスデザインやコースデザインのような本格的な専門家はまだ育っていない状態である。現段階ではそれぞれの学校のコースデザインは昔のままであるか、日本での日本語学校、日本語学科のカリキュラムを手本にしたものも少なくない。一時代前の台湾における日本語教育事業は、日本支配時代に日本の国語教育を受けた台湾人が、日本人教師に委ねるしかなかった。それが原因であろうか現在の台湾における日本語の教材も昔の国語文法時代のままの、つまり五段活用方式の学校の文法を勉強している。日本語で書かれた日本語文法書も台湾の書店で求めることができるのだが、教科書として使われているのは昔のままの文法書が多い。教師も五段活用方式の方がよく分かっているからである。

海外での日本語教育でも五段活用方式は使われていないが、台湾ではそれを今でも学生に暗記させている。日本での日本語教育ですでにそうした方式をとらないだけでなく、国語学でも五段活用変化の取り扱いが問題になっている。古文の解釈には使えるかもしれないが、現代文の勉強にはあまり役に立たないのが原因である。

しかし、せっかく一生懸命に五段活用方式を暗記しても、いざ日本に留学した時日本ではまた別の文法を使うため、再び日本で日本語文法をやり直さなければならないことに困惑を感じる学生の話をよく耳にする。台湾の日本語文法の指導は教師の日本語学の教養にもよるが、国文法、日本語文法、日本語教育文法の三つの文法の違いが分からない台湾人教師も少なくない。学生の時間を無駄にしないためにも、教師の日本語文法の再研修をする必要があるであろう。

これからの日本語教育は、学習経験者である台湾人が、その言語背景にふさわしい学習方式を開発していかなければならないと思う。学習経験者こそがその学習上の問題点を直視することができるからである。そのための日本語の語学の専門教師や教育専門家などの養成の面で、日本からの指導者は欠かせない。「孤立語である漢語を背景にした台湾という社会環境のなかでの教育を軸とした」日本語教師の養成をめざしてほしいものである。

日本語教育の現状及び期待

今年の7月1日に台北では日本語センターがオープンした。日本語教師の育成の協力や、教材や言語資料など、日本語普及の御手伝いの役割を演じる重要な場所を提供している。交流協会という窓口ではあるが、日本側が国交のない台湾に日本語センターを作ることに、日本と台湾の文化の交流の深さが示されているようにも見られる。しかし、せっかく設けられた日本語センターをただの象徴に止めてほしくない。日本語教師の質の向上や日本に関する情報の公開あるいは教授法の研究などを推進し、公益の場としてあってほしい。また、共同研究の場所を提供することや教授法の開発や研究のネットワーク化などを期待している。

わずか三時間ほどの距離である台湾と日本は、政治的には仕方のない面があるにしろ、密接な文化交流を大切にキープしていかなければならないと思う。日台の交流を深めていくためにも、日本語教育を発展させ、台湾人が勉強した日本語で、自分の文化、言葉、価値観などを日本の友人、そして日本に伝えることができるような正確な日本語を習得してほしい。日本語教師は言わば、日本と台湾の掛け橋の人材を作り出すような存在である。風当たりの強い日台関係に強い掛け橋を作り出すためにも、自分自身にしかるべき見識を備える必要があるのではなかろうか。と私自身にも言い聞かせている。

フロアーからの報告

スウェーデンにおける日本研究の現状

高宇ドルビーン 洋子

スウェーデンと日本との関係は古く、十七世紀にストックホルム貴族のフレドリック・コイェットがオランダ東インド会社の代表として長崎出島に出向していたこと、十八世紀にはリンネの弟子のツンベルグがオランダ人として鎖国下の日本で動植物の採集に勤しんだことや、ロシア人として日本と接触したラックスマンがスウェーデン系のフィンランド人だったことなどが知られている。しかしその後、明治期に他のヨーロッパ列強国が競って東アジアに関心を向けていた時、すでに大国としての地位を失っていたスウェーデンは山積する内政問題を抱え、その関心の対象を北ヨーロッパに留めていた。そのため二十世紀に入っても日本に対する関心はさほど大きくなかった。

これに対して、中国に関しては二十世紀の前半から主に学術的な活動が活発に行われた。スヴェン・ヘディンによるシルクロードの探検やバーナルド・カールグレーンの中国語音韻の研究、そして北京原人発掘の際の協力などにより、中国への関心は大いに高まった。

出足で立ち後れたスウェーデンの近代における日本学は、六十年代の後半から徐々に活性化していく様になった。現在ストックホルム、ヨテボリ、ルンドの三つの大学に日本語及び日本学を専攻できる日本語学科があり、ストックホルムとヨテボリには教授職がある。

スウェーデンでは大学生は通常一年の就業で40ポイントを履修できる。120ポイントを履修するとフィルカンド、160ポイントでフィルマーグという称号を与えられる。どのような科目を集めるかは学生が自主的に決められるが、大学院への入学資格は各学部または学科がそれぞれ規定している。法学部や経済学部などでは、日本の大学の様に履修する科目が決められているところもある。

前述した三つの日本学科では、以前は6コース（80ポイントまで）だったのを、近年8コース（120ポイントまで）に増やした。

また、この三つの日本学科には修士博士課程の大学院がある。大学院は修士課程が80ポイント、博士課程が160ポイントで、それぞれそのポイント数の半分が論文に当てられ、あとの半分はセミナーや専門知識の取得に当てられている。通常学部の学生が大学院に入学する際に希望専攻分野の専門知識取得のために他の学部学科での勉強を勧められることはよくあり、そこで得たポイントはある程度は